

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：33918
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：20K02281
研究課題名（和文）精神障害に関する啓発プログラム開発：共生社会の実現を志向する意識の涵養を目指して

研究課題名（英文）Development of an Anti-Stigma Program on Mental Disorders: Towards Cultivating Consciousness for Achieving an Inclusive Society

研究代表者
大谷 京子 (Otani, Kyoko)

日本福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：90434612
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：A地域自立支援協議会精神障害者地域生活支援部会啓発チーム（以下、A啓発チーム）との協働により、精神障害に関する啓発プログラム開発、効果測定の指標開発、効果的プログラムの普及を目指した。A啓発チームは当事者や家族、障害者福祉関係者、行政機関などで構成される。多様な参加者との共同研究が実現できた。

これまで展開されてきた啓発プログラムについて、研究者の講義から得られた情報や実践の振り返りを通して改良を重ねた。スティグマ態度と社会的距離尺度を用いて、実践の効果を測定した。

COVID-19の影響で例年通りの実践ができなかったが、4年間の高校での実践を通して効果のある啓発プログラムを生成できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、参加型アクションリサーチであり、精神障害当事者、家族、支援職員、行政といった多様なステークホルダーが参画する共同研究である。啓発プログラムの設計、アンチスティグマ研究の学び、改良、すべてにおいてチームで進められた。

第二に、本啓発プログラムは社会モデルの視点に立つ。精神障害や病の理解の促進よりも、地域で当たり前暮らしの一員としての精神障害者との出会いを目指した。知識とスティグマは関連しないことが報告されており、人生の先輩として経験を共有する機会の提供を中心にした。第三に、本プログラムは精神障害に対するイメージを好転させ、社会的距離を縮めることが検証され、エビデンスを得た。

研究成果の概要（英文）：Through collaboration with the A Anti-Stigma toward Mental Health Team in a Community Support Committee for Independent Living (hereafter referred to as the "A Team"), efforts were made to develop an anti-stigma program on mental health, establish indicators for measuring its effectiveness, and promote the dissemination of effective programs. The A Team consists of individuals with lived experience, families, professionals in mental health, and government agencies, enabling collaborative research with diverse participants.

Building upon existing anti-stigma programs, improvements were made through reflections on practical experiences and insights gained from lectures by researchers. The effectiveness of the interventions was measured using scales for stigma attitudes and social distance.

Although the usual practices could not be carried out due to the impact of COVID-19, an effective anti-stigma program was developed through four years of implementation in high schools.

研究分野：社会福祉

キーワード：精神障害 アンチスティグマ 啓発プログラム 当事者参加

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

日本の精神病患者数は年々増えており、生涯有病率は1/4とも言われている。精神疾患は「広範かつ継続的な医療の提供が必要と認められる」五大疾患として2013年度から医療計画に記載されるようになってきている。これほど国民に広くかかわる疾患であるが、精神疾患に関する認知度は低い。

さらに精神障害に対する根強い偏見は改善されず、精神障害者は地域で生きづらい状況を余儀なくされている。内閣府による「障害者の社会参加促進等に関する国際比較調査」でも、ドイツ、アメリカと比較して日本では、「近隣に精神障害者が転居する」ことへの受け入れが悪いなど、精神障害者に対する偏見は根強く残る。

その原因として、1970年代以降、義務教育の学習指導要領から精神疾患の項目が外され、国民の精神保健全般に関する基礎知識が不十分であること、歴史的に日本では隔離収容政策がとられて、身近な精神障害者の存在を認識できずきたこと、精神障害者による犯罪報道だけがクローズアップされ危険なイメージが流布され続けていること、精神障害者に対する社会福祉制度の立ち遅れにより、地域の中で当たり前暮らし環境が整っていなかったこと等が挙げられている。

こうした現状を踏まえて2002年以降、厚生労働省では、精神障害に対する国民の理解の深化を重要課題として挙げ、普及啓発の重点的実施を促している。実践と調査研究も増えてきているが、実践事例そのものが小規模で、実態把握がされにくく限定されている。疾患知識の教育に重点を置いた実践の効果検証では、短期的には有効だが持続しないことや、メンタルリテラシーが向上しても心理的距離や受け入れの寛容性は変わらないことが明らかにされている。

一方で高等学校学習指導要領が改訂され、2022年度から40年ぶりに精神保健が授業内容に組み込まれることになった。しかしそれは精神疾患を中心とした内容で、偏見のない意識の醸成に寄与するものとしては不十分である。今後広がる疾患中心の精神保健教育を補完し、偏見のない意識醸成のための啓発プログラムの開発と普及が求められている。

精神障害者を生きづらくしているのは社会の偏見であり、それはとりもなおさず一般市民の意識、心理的な壁である。そこで、自他の差異を認め、多様な存在を受容しあえる共生社会実現のための意識変革に資する効果的プログラム開発が喫緊の課題であると考えた。

2. 研究の目的

A地域自立支援協議会精神障害者地域生活支援部会啓発チーム（以下、A啓発チーム）との協働により、精神障害に関する啓発プログラム開発、効果測定の指標開発、効果的プログラムの普及を目指した。しかしCOVID-19感染拡大のため、プログラムが実施できなくなり、計画の大幅な見直しに迫られた。そこで目的を、既存の評価指標を用いてエビデンスを得た啓発プログラムの開発に絞った。

3. 研究の方法

本研究では、①効果的実践モデルの開発、②啓発実践、③アンケート調査を用いてプログラムを評価し、改良を行った。

①Aチームでは、中学/高校/大学といった教育機関のみならず、ヘルパーや精神科病院職員等を対象にした啓発プログラム実践を2010年から展開している。チームメンバーで検討してきたプログラムについて、一定の手応えはあったが、さらに取り入れるべき要素を検討した。そのために、ヒューマンライブラリーの取り組みをする研究者と、アンチスティグマに関する造詣の深い研究者から講義を受ける機会を設けた。それらから、さらにプログラムに加えること、やっつけられないことについて明確にしていった。

②2020年度から4年にわたって、B高校の2年生を対象にした啓発プログラムを実施した（表1参照）。B高校では2年生全員を対象にした多様な外部講師を招聘した連続の福祉教育を展開しており、そのうちの2コマで本プログラムは実施している。「プログラムは、大学生によるプレゼンテーション（精神障害と精神障害者に対する親和性を高めることを目指した劇やクイズ）、当事者/家族/関係者の体験談、シンポジウム（高校生数名、高校教員、当事者数名がシンポジストになり、1つのテーマについて議論する）という流れである。前年度のアンケート結果をチームで共有し、シンポジウムテーマを設定したり、NGワードや高校生への配慮事項などを議論したり、改良点を検討した。

表1. 各年対象者とアンケート回収率

年度	事前	事後	対応のあるサンプル	有効回答率
2020	125	110	107	85.6
2021	127	134	122	91.0
2022	134	120	84	62.7
2023	131	126	120	91.6

③毎年のプログラム受講前後で、スティグマ的反応尺度と社会的距離感尺度からなる匿名アンケートの回答を Google フォームを用いて回収した。質問紙は、坂野ら (2010) の「スティグマ的反応」尺度と、山崎 (2012) の「社会的距離」尺度を、高校生に回答しやすい項目に修正して作成した。いずれも 6 件法で回答を求めた。

IBM SPSS ver. 28.0.1.0 を使用し、スティグマ的反応尺度は因子分析をし、下位尺度得点を算出した。社会的距離は総和を用いて、前後比較のために対応のある t 検定を行った。

倫理的配慮として、研究内容、個人情報取り扱い方法を記した説明文書を、プログラム参加者全員に配布したうえで、口頭で説明し、調査協力への同意を得た参加者から回答を得た。日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認 (19-23) を受けた。

4. 研究成果

因子分析 (最尤法・プロマックス回転) の結果、スティグマ的反応は、「精神障害者との関わりにくさ」と「恥意識」という 2 つの因子からなることが示された (表 2 参照)。「関わりにくさ」因子は、「精神障害者には話しかけづらい」「精神障害者と一緒にいると緊張する」といった 5 項目で構成される。「恥意識」因子は、「家族に精神障害者がいるのを知られるのは恥だ」「精神障害者は自分の状態について恥ずかしいと感じるべきだ」といった 5 項目で構成される。

表 2. スティグマ的反応因子分析結果

	関わりに	
	くさ	恥意識
精神障害者には話しかけづらい	.937	-.057
精神障害者と一緒にいると緊張する	.814	.018
精神障害者はなにをするかわからない	.806	.049
精神障害者と一緒にいると落ち着かない	.761	.137
精神障害者と話すのは怖い	.749	.222
精神障害者と話すのは難しい	.705	.194
自分が精神病になったら、信頼できる友人には打ち明ける	.695	-.215
家族に精神障害者がいるのを知られるのは恥だ	-.125	1.057
精神障害者は自分の状態について恥ずかしいと感じるべきだ	-.174	.884
精神障害者は自分の状態について他の人に話すことをためらうべきだ	.085	.815
もし家族に精神障害者がいたら、それを友人に知られると困る	.142	.784
もし精神障害者が治療を受けていることを知られたら友人は減るだろう	.183	.548

最尤法 プロマックス回転

下位尺度得点の前後比較では、いずれも有意に好転していた。全ての項目を総計した「社会的距離」も、有意に近くなっていた (表 3 参照)。しかし 2022 年度のみ、事後の方が得点が高くなっており、なかでも「恥意識」は、1%水準で有意だった。

表 3. 2023 年度前後比較結果

	事前		事後		t値	自由度	有意確率 (両側)	効果量 (Hedges)
	平均	SD	平均	SD				
関わりにくさ	20.8417	16.44301	15.0333	14.9623	9.25	119	<.001	0.839
恥意識	10.4333	5.20299	8.4	3.83132	4.289	119	<.001	0.389
社会的距離	38.675	16.44301	28.8583	14.9623	7.532	119	<.001	0.683

2022 年度以外の結果を踏まえると、本プログラムはスティグマ的反応を抑制し、社会的距離を縮小させる効果が認められる。先行研究でも、スティグマ低減のために最も有効なプログラムは、当事者との接触体験だとされており、語りとシンポジウムを通して経験や思考の交換をする本プログラムは有効だといえる。

しかし 2022 年度の結果から課題が示された。シンポジウムの中で当事者が性的な表現を使う場面があった。そのメッセージは、他者と比較して自己卑下する高校生の話を聴き、他者と比較することの問題点、個性を大切にすること、多様性に寛容であることの大切さを伝えようとしたものだったが、意図は伝わらなかったと推測できる。生徒の感想文には、「大人としておかしいと思った」「授業でふざけないでほしい」といったものもあった。つまり「大人」や「授業」といった定型イメージからの逸脱が、「恥ずかしいこと」として捉えられた可能性がある。

ありのままの当事者が、参加者の定型、すなわち許容範囲から逸脱していると捉えられると、精神障害者へのスティグマ態度を助長するリスクを負う。一方で多様性への寛容度を醸成するには、参加者の持つ「定型」を少しずつ解体する必要がある。先行研究でも、「清潔感のある」「参加者と属性の似た」当事者の登場が有効だとされている。共感性を高める工夫、参加者側の「定型」を知る努力、その定型を解体しつつ再構築する戦略が、本プログラムの効果を維持するために求められると考える。

引用文献

山崎喜比古 (2012) 『心の病へのまなざしとスティグマ—全国意識調査—』明石書店。
 坂野純子・菊澤佐江子・的場智子・山崎喜比古・杉山克己・八巻知香子・望月美栄子・笠原麻美 (2010) 「精神障害者に対する大学生のスティグマ的反応尺度の因子構造と関連要因」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』17(1), 19-25。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 56
2. 論文標題 ソーシャルワーカーはいかにしてソーシャルワーカーになるのか：精神保健領域のソーシャルワーカーへの経年インタビュー調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 キリスト教社会福祉学研究	6. 最初と最後の頁 掲載予定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子・保正友子・山口みほ	4. 巻 47
2. 論文標題 ソーシャルワーカーの実践能力評価指標開発：3種の専門職団体への質問紙調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 54-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 143・144
2. 論文標題 専門職アイデンティティ概念の整理 ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ形成に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本福祉大学社会福祉論集	6. 最初と最後の頁 80-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 52
2. 論文標題 ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ尺度開発：バーンアウト、職業コミットメント、職務満足、離職意識との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神保健福祉	6. 最初と最後の頁 168-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 47(1)
2. 論文標題 専門職アイデンティティを構成するソーシャルワーク役割認識と統合プロセス 精神保健福祉領域初任者 ソーシャルワーカーへの追跡調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 掲載予定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 52(3)
2. 論文標題 ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ尺度開発：バーンアウト、職業コミットメント、職務満 足、離職意識との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神保健福祉	6. 最初と最後の頁 掲載予定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷京子	4. 巻 143・144
2. 論文標題 専門職アイデンティティ概念の整理 ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ形成に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本福祉大学社会福祉論集	6. 最初と最後の頁 81-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大谷京子
2. 発表標題 精神障害に関する啓発プログラムの効果 - 高校生を対象にした4年間の実践評価 -
3. 学会等名 日本社会福祉学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------